

# 問題発見し、目的意識をもち、主体的に学び合う児童生徒の育成 —事前の活動から実践までの一連の学習過程を通して—

特別活動研究会議

研究員 漆島 太一（川崎市立鷺沼小学校） 門別 整（川崎市立向丘小学校）  
仲宗根 唯（川崎市立南加瀬中学校） 堀米 幸男（川崎市立南大師中学校）  
指導主事 下村 智英

## I 主題設定の理由

社会の在り方がこれまでとは劇的に変わりつつある中、これからの社会で生きていく子どもたちには、様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していけるようになることが求められている。そのため、学級や学校における生活上の諸問題の解決のために話し合い、多様な他者と協力して実践を行う特別活動が担う役割は大きいといえる。

本研究会議では、「議題を児童生徒が見つけれない」「児童生徒が目的意識をもてていない」「話合いで教師が介入しすぎてしまう」等、学級会に取り組む教員の声に対応し、今後の実践に生かせるようにと考え、特別活動の中でも学級活動（1）の学級会に焦点を絞って研究に取り組むことにした。自発的・自治的な活動である学級活動（1）では、解決すべき問題を児童生徒が発見し、何のために話し合って実践するのかという目的意識を共有し、決めたことを全員で実践していく。このような学級会を行えるようになる為の手立てを明らかにするため、本研究主題を設定した。

## II 研究の内容

### 1 研究の方法

研究主題に基づき、次の3つの視点を設定した。

#### （1）視点①：問題発見

小・中学校学習指導要領解説特別活動編には、学習過程が示され、学級会で話し合う議題は、学級や学校生活における生活上の諸問題から課題を見いだすことと記されている。児童生徒が、自分たちの学校生活を振り返り、〇〇をしたい、もっと〇〇できるようになりたいと前向きな思いから議題を作ることができるかという点を1つ目の視点とした。

#### （2）視点②：目的意識

学級会は、学級全員で意見を出し合って話し合い、自分にも皆にもよい内容に合意することを目指す。児童生徒が議題提案者の思いや願いを基に、何のために行うのか、話し合った後にどのようになっていたのかについて共通理解をしておき、話し合いと実践を行えたかという点を2つ目の視点とした。

#### （3）視点③：主体性

学級会は、児童生徒が主体性を発揮し、目標達成に向けて活動を進めていくことで自治的な活動となる。児童生徒が、司会グループ等を中心として自分たちで話し合いを計画して、合意形成できたかという点を3つ目の視点とした。

学級会は本時だけでなく、事前の活動から実践までの一連の学習過程を大切にしているため、学級会だけでなく、その事前の活動から事後の活動までについて検証することにした。

## 2 検証

（1）A 小学校 1 年生の実践 議題「なかよししゅうかいをしよう」（6月）

### ①学級の実態と3つの視点

小学1年生ということもあり、学級会の経験はなかったので、4月から担任が話合いの型を伝えたり、日常の会話から議題になる言葉を取り上げたりしながら学級会の経験を積んできた。しかし、何のために学級会を行うのか、なぜ実践するのかについては、途中で曖昧になってしまったり、忘れてしまったりする。そこで、児童が何のために話合いを行っているのかという目的意識に重点を置いた検証を行った。「問題解決」では、教師が学級生活で発した児童の願い（〇〇したい）に気付き、議題として取り上げられるよう積極的に声かけをする。「目的意識」では、教師が中心となり、何のために話し合うのかを全体場で共有する。「主体性」では、事前に指導した「話合いの型」や「学級会の進め方」に即して話し合うことで、見通しをもつことができ、一人一人が安心して、主体的に意見を伝えられるようにする。

### ②事前の活動

教室に掲示された4月と5月にクラス遊びをしたときの写真を見ながら「楽しかったね」「また皆でやってみたいね」と話をする児童がいた。その会話に気付いた担任が、自分たちの思いを議題として提案してみてもどうかと声をかけた。後日、「もう一度皆で楽しく遊んで、クラスの仲を深めたい」という願いが議題箱に届いた。遊びを通して互いに触れ合う機会をつくりたいという提案者の思いは、友だちとの仲を深めるためのよいきっかけづくりになり、学級目標達成にも近付くと考え、本議題を選定した。

### ③本時の授業

学級会の基本的な流れに即して話し合うことで、見通しをもって学級会に臨むことができた。また、自分の考えを皆に伝えたいという思いを強くもつ子が多く、話合いでは多様な意見が出された。意見を出せる時間を十分に確保することで、「意見を言いたい」という主体的な気持ちを伸ばすことができた。話合いの途中に、自分の思いとは異なる意見に対して、すぐに否定する発言をしてしまうこともあった。このようなときに、教師が積極的に「仲良く、みんなで楽しい集会をしよう」という話合いのめあてを確認することで、「何のため」という目的意識をもって話し合うことができた（図1）。そして、「だるまさんの一日」「じゃんけん列車」「いす取りゲーム」の3つのゲームを行うことに決めることができた。



図1 めあてをすぐに確認できる板書

### ③本時後の実践

準備の段階では、司会やゲームの準備等の自分の役割を意識し、一人一人が主体的に友達と協力して行った。集会当日は、自作のめあてを掲示した（図2）。ゲームを行っている途中、スムーズに行えない場面があったが、掲示してある自分たちのめあてを再確認することで、「仲良くやろう」「楽しくやろう」という言葉が自然と出てきて、雰囲気よく楽しい集会の時間を過ごすことができた。



図2 自作のめあて

### ④実践後の振り返り

「なかよく、たのしくできたか」という振り返りでは、全員が「できた」と答え、めあての達成を実感することができた。それぞれの役割についての振り返りでは、「友だちと一緒に計画や準備をし

たことが楽しかった」と答える児童が多く、集会当日までの過程でもめあてを意識できたことが分かった。一方で、「ルールがよく分からなかった」と活動をしていて困ったことの見聞もあった。活動には失敗がつきものなので、次回の活動で改善したい課題を見付けることができた。

### ⑤考察

本時では、児童が学級目標とめあてを照らし合わせて考えるようにし、何のために話し合うのかという目的意識をもちながら話し合いを進める姿が見られた。1年生ということもあり、教師が指導する場面が多くなると予想していた。しかし、教師の児童の発言への価値付けにより、モデルとすべき友だちの姿が分かり、それを真似て「この集会は何のために行うのか」という発言をする姿が見られた。この時期からしっかりと目的意識をもてるようにすることが、今後の学級会等における話し合い活動につながるのではないかと考えた。

## (2) B 小学校 6 年生の実践 議題「6-4の『聴く』をレベルアップさせよう」(7月)

### ①学級の実態と3つの視点

本学級は、集会を中心とした議題で学級会を行ってきたが、自分たちの学級を振り返って問題発見を行うことに重点を置いた検証を行った。「問題発見」では、事前に学級の現状について振り返り、見つけ直ししながら議題を見つけ出すようにする。「目的意識」では、話し合っただけ実践した自分たちの姿を考え、それに向かうという目的を共有する。「主体性」では、事前に集めた全ての意見に対して、一人一人が考えをもって、学級会に臨むようにする。また、司会グループの事前の準備で、予想できる合意の仕方や時間配分などを確認することで、主体性を高める。

### ②事前の活動

夏休みが近くなり、6年生としてこれまで頑張ってきた自分たちの学級に目を向け、さらにレベルアップしていきたいという思いを抱く児童が出てきた。その様子に気付いた教師は、学級目標に照らし合わせて自分たちを振り返ってみるとよいのではないかとアドバイスを送った。このアドバイスを受け、後日、議題箱に「切り替えを早くできるようにしたい」という願いが入り、教師を含めた計画委員会で提案者の思いを丁寧に聞き、まずは学級の現状を把握することにした。朝の時間を使って教師が児童に話を聞き、現状を模造紙にまとめた(図3)。その結果、

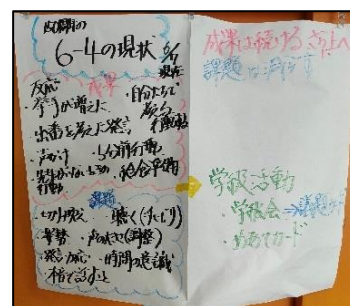


図3 学級の現状のまとめ

まずは「聴く」ことを学級全体で取り組むことがよいのではないかという話になり、「聴く」に焦点を当てた学級会を行うことにした。また、司会グループが事前に一人一人の議題に対する考えを集めておくことで、予想できる合意の仕方や時間配分などを確認できた。また、教師は学習カードにコメントしながら一人一人の考えを価値付けしたり、意図が伝わりにくそうな内容には個別に意見を聞いて修正したりし、主体的な話し合いを目指した。

### ③本時の授業

学級の課題を「聴く」に絞った話し合いにすることで、何を改善したいのかという目的が明確になり、一人一人が自分の考えをもちやすくなった。事前に一人一人の意見を集めて、司会グループが中心となり9つの意見に絞っておいた。9つの意見について話し合い、思いが似ている意見を分類整理してさらに絞り(図4)、「うなづく」「相手の方を見る」「聞き返す」の3つを週ごとに変えて実

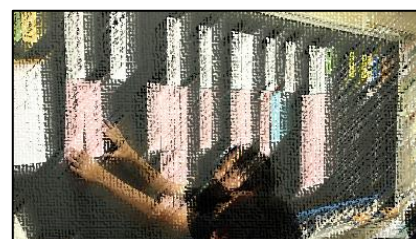


図4 意見を分類整理する様子

践することに決定した。

#### ④本時後の実践

自分たちで今週の目標として重点を置く内容を掲示し（図5）、いつでも確認できるようにした。話し合っただけで決めたことは、1週間ごとに振り返り、全員が目標を達成できたと感じられたら次の目標に移ることにした。実践途中の感想では「〇〇さんが体も向けて聴いているのを見て、真剣に聴いてくれているのが分かった」など友だちのよさを見付けると共に、自分たちの成長も実感していることが分かった。

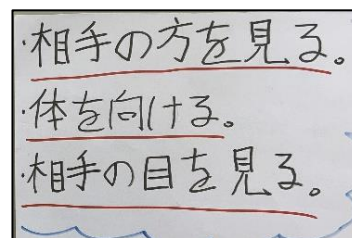


図5 目標の掲示物

#### ⑤実践後の振り返り

児童の振り返りには、「聴くことを頑張ってきて、仲間の方を見ることは当たり前になった。これからは、感情を込めた心からの反応ができるようになりたい」「これからもこの活動を続けて、友達の話聴き、さらに自分たちを成長させるために、新たな課題を設定した方がいいと思う」など前向きで、自分たちをもっとレベルアップさせたいという願いが多くあった。

#### ⑥考察

本議題は、児童の声をもとに議題にしたことで、自分たちの議題であることを意識することができた。また、教師が児童の意見を聞き取り、まとめながら学級の課題を確認することで、解決すべきものであることを学級全体で理解することができ、一人一人が目的意識をもって学級会に臨むことができた。何のために行うのかという目的意識がはっきりしていることで、主体的に考えることができ、研究の3つの視点は関連が深いと考える。また、これまでとは異なる集会の議題での話合いでも、自分たちで合意形成できたのは、児童の話合い活動の積み重ねに因るところが大きいと考える。

### (3) C 中学校2年生の実践 議題「全員が意見を出しやすい雰囲気をつくるための

1組チャレンジをしよう」(10月)

#### ①学級の実態と3つの視点

本学級では、生徒から議題が出にくいという現状がある。そこで、自分たちの学級の様子から問題発見を行って議題とすること、主体的に話し合えるようファシリテーターを設置することに重点を置いた検証を行った。「問題発見」では、事前に合唱コンクールの練習を振り返り、見つめ直しながら課題解決に向けた議題を個人で考えることにする。「目的意識」では、各行事の目標を達成した自分たちをイメージし、それに向かっていくことを共有する。「主体性」では、事前に集めた意見に対して、一人一人が考えをもって、話合いに臨むことにする。事前に想定される意見や合意形成するための見通しを、ファシリテーターが司会グループと一緒に考え、自分たちで学級会を進められるようにする。この時、キャリア在り方生き方ノートを活用した。また、ファシリテーターは、小学校の学級会で行う学級担任の役割の一部を担うようにし、学級会の話合いの流れをコーディネートしていく。

#### ②事前の活動

合唱コンクールでの理想像とクラスの現状を振り返り、議題を学級全員が考え、議題案を提出することにした。すると、「パートリーダー以外の方が意見を伝えにくいので、自分から意見を伝えやすくなるような取組をみんなで話し合いたい」という意見が複数あった。これを受け、合唱コンクールの理想像「個性を尊重する」の具体的な姿である「自分から意見を出しやすい

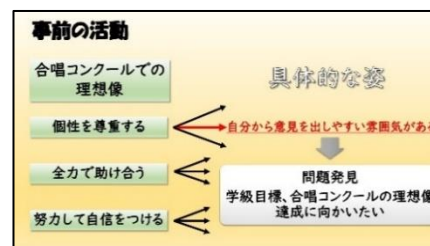


図6 議題選定の流れの図

い雰囲気がある」に迫れることができると考え、本議題を選定した（図6）。ファシリテーターは、本学級会から設置した。

### ③本時の授業

本議題の提案理由に「パートリーダー以外の方が意見を伝えやすくなるには、互いが褒められたり、認められたりして学級の雰囲気をよくすることが大切だと思う」とある。事前にこの提案者の思いをもとに、1組チャレンジ案を皆で出し合い「届けろ！現場の意見」「教えて！みんなも歌唱王」「盛り上げろ！いいね祭り」「目指せ！リアクション芸人」という4つの案に絞った。どれに決まっても誰もが意見を伝えやすくなりやすい内容であり、目的を意識していることが分かった。

ファシリテーターが司会をサポートしたり、一人一人が意見を伝えやすいよう声をかけたりする姿が見られ、主体性を感じる事ができた。

### ④本時後の実践

実際の活動では、パートリーダーが積極的に一人一人のよさを伝えることを繰り返した。「ここを直そう」という注意よりも「〇〇さん、よかったよ」「すごいね」など少しオーバーであっても伝えることにした。そして、取組を自分の言葉で答えやすいよう「どうやったの」と相手に問うことで、頑張りや意識したことを伝えやすくした（図7）。また、帰り学活を中心に、パート練習中に出た意見を共有した。自分のよさを伝えることには照れがあるが、パート

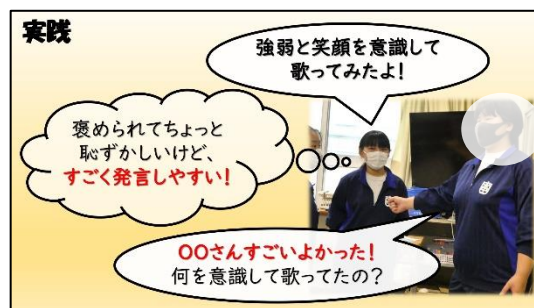


図7 パート練習中によさを伝える様子

リーダーから褒められたことを報告する活動には取り組みやすかった。そして、この報告を受ける側が上手に聴いたり、相槌をうったりすることで、よりよい学級の雰囲気が生まれていった。

### ⑤実践後の振り返り

多くの生徒が、仲間の意見を受け取って練習することができたと答えた。また、昨年以上に自分たちで練習を頑張ったり、練習自体を楽しく感じたりすることができたという意見もあった。本番のコンクールでは、目指す賞までは届かなかったが、自分たちの取組に納得をし、価値あるものだったと感じていた。

### ⑥考察

合唱コンクールに向けてどのように取り組むかは、どの学級でも関心が高い。すでに取り組んでいる合唱コンクール練習の様子から議題を考えることで、クラスの問題を自分事として捉えられた。今回は、議題を全員が出すことで、学級の様子を全員が考える機会となり、自分事として問題をとらえ、主体的な話し合いになった。ファシリテーターの役割を生徒が担うことは難しいが、多くの生徒がこの役割を経験することで、ファシリテーターを支える生徒が増えると考えられる。

## (4)D 中学校2年生の実践 議題「5組がより一層協力できるクラスになれる取組をしよう」(11月)

### ①学級の実態と3つの視点

本学級では、ファシリテーターを中心に話し合い活動を行ってきた。本実践でもファシリテーターを設置し、これを生かした検証を行った。「問題発見」では、学級目標達成に向けたアンケートを行い、そこから学年末には「どのようなクラスになってほしいか」という思いから議題化する。「目的意識」では、学級目標に示されている3つのキーワードのうち協力の焦点を当てることにする。「主体性」では、ファシリテーターを置き、司会グループと協力しながら自分たちで話し合いを進められるようにす

る。

## ②事前の活動

前期の様々な行事を終えた頃に学級目標の達成に向けたアンケートを行った。そこから「学年末にはどのようなクラスになっていたいか」という一人一人の思いをクラスで共有し、議題化した。この議題に対する一人一人の考えを基に班としての企画案を考え、司会グループに伝えた。学級会の準備段階からファシリテーターも会議に参加し、当日の司会グループと一緒に話合いの流れを考え、自分たちで話合いを進められるようにした（図8）。



図8 事前準備の様子

## ③本時の授業

事前に各班から集めた6つの企画について話し合った。自分の意見をもって話合いに臨むことで、スムーズに賛成意見や心配意見を出し合えた。意見をまとめる段階では、小グループで話し合った。この時、ファシリテーターが各グループを回って話合いの様子を伺ったり、アイデアのよさを伝えたり、発言を促したりした（図9）。グループによっては、自分たちの意見に自信をもつことができず、発言を控えてしまうことがある。そこにファシリテーターから「ナイスアイデア」「伝えてみようよ」と声をかけてもらえることで、自信をもって発言をすることができた。終末では、3月まで「Who is さぶろう」（一般的なゲーム名：私は誰でしょうゲーム）「vs お題」（一般的なゲーム名：ジェスチャーゲーム）のゲームを帰り学活で行うことに決まった。



図9 ファシリテーターの様子

## ④本時後の実践

まず「Who is さぶろう」を実践することにした。担任がBOXからレベル別に分けたヒントカードを引いてヒントを伝えた。すると、ヒントの内容を復唱してメモをとったり、周りを見渡して誰だろうと考え「〇〇さんかも」と自分の考えを班の仲間と共有したりしていた（図10）。自然と仲間と意見交換をすることができ、生徒が笑顔で話し合っている様子から学級目標にある「笑顔」に近づく姿があった。実践を繰り返すうちに、より早い段階で正解することができるという高いポイントを得ることができるようにしたいというアイデアが生徒から出て、班ごとにポイントを競うことを追加した。



図10 ゲームの様子

## ⑤実践後の振り返り

「仲間と協力して正解した時の達成感が最高です」「毎日の帰り学活でやりたい」などの意見がほとんどで、「次はもっと楽しくできる工夫をしていきたい」と次への思いをもつ生徒もいた。

## ⑥考察

事前の活動からファシリテーターも一緒に打ち合わせに参加することで、話合いの方向を十分に理解してコーディネートすることができた。教師は、可能な限り準備の場に居ることにし、困った事があればすぐに相談にのれるようにした。学級会では、仲間がファシリテーターを務めることで、自然と進行に協力しようとする雰囲気が学級内に生まれていた。話合いは、学級の雰囲気が関係することが多い。本実践では、みんなが協力しようとする雰囲気が、合意へとつながったと考えられる。

# Ⅲ 研究のまとめ

## 1 各学級の児童生徒の変容

小・中学校学習指導要領解説特別活動編には、経験や積み重ねの大切さが示されている。そこで、検証を行った学級における児童生徒の主な変容を担当の振り返りをもとに、研究会議でまとめた。

#### (1) A 小学校 1年生 (図 11)

教師が児童に目的意識を大切にすることを伝え続けた。学級会を重ねるたびに目的意識に関わる「話し合いのめあて」を意識する発言が多くなった。また、1年生でも一人一人が問題発見から解決までの見通しをもてるようになったことで、主体的に話し合い、問題を解決しようとする姿が見られるようになった。学級会は、年間で11回行い、輪番制による司会グループを全員が経験することができた。



図 11 学級会の様子

#### (2) B 小学校 6年生 (図 12)

司会グループが中心となり、問題を発見した提案者の思いを「話し合いのめあて」に反映し、学級全体へ共有することを繰り返した。目的意識が明確になり、提案者の思いに寄り添いながら、一人一人が主体的に話し合う姿が見られた。また、学級会以外でも主体的に話し合う児の姿が見られ、主体的・対話的で深い学びの授業改善にもつながったと感じた。



図 12 学級会の様子

#### (3) C 中学校 2年生 (図 13)

生徒が問題発見をして議題を選定し、提案者の思いに寄り添って話し合うことを繰り返した。生徒が問題を発見することで、課題意識も目的意識もよりはっきりしたものになった。また、話し合いの経験を積むことで、自分たちで準備をスムーズに行えるようになった。ファシリテーターを置くことで、教師に頼らず自分たちの主体的な話し合いになったが、ファシリテーターにより話し合いの流れが左右されることもあると感じた。



図 13 学級会準備の様子

#### (4) D 中学校 2年生 (図 14)

学級目標や行事を終えた自分たちの姿を共有し、これに向けた「話し合いのめあて」を意識しながら学級会を積み重ねた。少しずつ司会グループが中心となって学級会を進行できるようになり、自分の意見を進んで伝えられる生徒が増えた。固定したファシリテーターが輪番制の司会グループを支える役割も担ったことで、これまでの学級会の流れを受けて話し合うことができた。また、相手の意見に寄り添う姿は各教科等でも見られるようになった。



図 14 学級会準備の様子

## 2 視点に基づく成果

各視点に基づく有効な手立てについて、以下のようにまとめた。

### (1) 視点①：問題発見

学校行事や学級集会の様子を「学級のあゆみ」として掲示しておき、楽しかったことを思い出すことで、またやりたい、もっと上を目指したいという思いを抱きやすくなった (A 小学校)。また、学級の全員がアンケート等を使って振り返り、この内容から課題を見だし議題とすることで、多くの児童生徒が抱えている課題を議題として取り上げることもできた (C 中学校、D 中学校)。

### (2) 視点②：目的意識

年度の初めに設定した学級目標を達成した自分たちのイメージを共有した (全校共通)。キーワード

が「協力」なら、「この学級は協力できていますか」と児童生徒に問うことで振り返り、「協力」をレベルアップしたい、改善するという目的意識が明確になった。また、議題を提案した児童生徒の思いを、計画委員会が中心となって丁寧に聞き取り、学級に伝えることで、同じ思いを抱いて話し合うことができた（全校共通）。

### （３）視点③：主体性

児童生徒が１冊ずつもっている「キャリア在り方生き方ノート」や各学級で使用している学習カードを活用し、学級会の事前から事後までの流れを確認することで、見通しをもつことができ、一人一人が主体的になれた（全校共通）。また、誰もが司会グループを経験することで、その大変さを経験から理解できた。そして、自分が司会グループでないときに、司会グループを支えようとする雰囲気が生まれ、皆の協力のもと自分たちで話し合うことができた（A小学校、B小学校）。

### （４）その他

学級会での話し合いと実践を繰り返すうちに、課題に対して協力して取り組み、話し合いで主体的に発言できるようになった（全校共通）。学級によりよい人間関係が形成されたことが学級経営の充実になり、主体的・対話的で深い学びとしての授業改善にもなった（全校共通）。

## ３ 視点に基づく課題

各視点に基づく今後の課題について、以下のようにまとめた。

### （１）視点①：問題発見

児童生徒の「話し合いたい」という思いから学級会は始まるが、児童生徒がこの思いを抱くためには、教師からの働きかけが必要になる。どのような働きかけをどのくらい行うのが効果的なのかについて考えていく必要がある。

### （２）視点②：目的意識

活動後のイメージがあることで目標意識が明確になるが、一人一人が抱くイメージに違いは生じる。その為、この差をなるべく小さくすることが重要になる。学級の全員がイメージを共有するためにできる手立てについて考える必要がある。

### （３）視点③：主体性

萎縮することなく、自分の意見を発言し合える学級の人間関係を基盤にし、学級会を積み重ねることで児童生徒の主体性は増す。一人一人のよさや可能性を生かし、他者の失敗や短所に寛容で共感的な人間関係の育み方について考える必要がある。

本研究会議では、学級のあゆみ等を活用した問題発見、計画委員会の活動による目的意識の深まり、学習カード等の活用による主体性の高まりを確認できた。しかし、それぞれの視点における異なる手立ての比較を行うことはできなかった。手立てについて、複数の視点から検証していくことが必要である。

最後に、研究を進めるにあたり、適切なお助言をいただきました先生方、研究をご支援いただきました研究員所属校の校長先生並びに教職員の皆様に心よりお礼申し上げます。

## 【参考文献】

- |   |       |
|---|-------|
| 文部科学省『みんなでよりよい学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)』文溪堂 | 2019年 |
| 文部科学省『学級・学校文化を創る特別活動(中学校編)』東京書籍         | 2017年 |